

## コラム2 防府市消防団長の活動より（平成21年7月中国・九州北部豪雨）

「命をかけての救助活動！（過去にない経験）」

防府市消防団 団長 原田幸男

防府市は、山口県のほぼ中央に位置し、三方を山々に囲まれ、南は瀬戸内海に面した地形で、市内の中央をほぼ南北に一級河川の佐波川が流れる、県内最大の平野を有する都市です。

平成21年7月21日、この日は前々日からの梅雨前線の活発な活動に伴う豪雨が降り続く中、早朝から、さらに追い討ちをかけるように非常に激しい雨が降り続いていました。

市に災害対策本部が設置され、消防団長である私は消防本部に設けられていた警防本部に詰めていましたが、集中豪雨による災害が市内各所で頻発し、消防本部も消防団もその対応に追われていた最中の11時50分頃、それは起こりました。

防府市から山口市へ続く国道262号線の市境となる佐波山トンネル南の下右田勝坂で、大規模な土石流が発生し、走行中の車両が押し流されたり、埋没しているという119番通報が入り、署の消防車2台と救急車1台が現場に向かいました。

現場に到着し、救助活動を開始しようとした直前、突然、第二波の土石流が発生し、その場にいた消防職員13人と出動車両がこの土石流にのみ込まれ、行方不明との通報が入りました。

この通報を受け、署と同時に消防団の出動命令も下されたため、私は副団長らと共に現場に向かいました。

現場に到着してみると、私が消防団員として活動してきた41年間でも経験したことのない大規模な災害現場でした。国道262号線上が約1kmにわたって、周囲の山から崩れ出た岩や流木、土砂等で埋まり、泥水が膝上ぐらいの高さで勢いよく流れ、国道より低い周辺の場所は大量の土砂が流れ込み、濁流となっていました。

行方不明の職員については、負傷者はいるものの、全員が難を逃れ避難していることが確認されました。

そして、市内各所で災害活動中の分団を除いた分団員の集結が完了したため、現場指揮本部において現場の被害状況の説明や今後の活動方針が示され、いつ第三波の土石流が発生するかわからない状況であることから、二次災害防止を念頭に高齢者等自力避難の難しい住民の救助を最優先に行うことになりました。

そのため、集まった各分団員に対して、活動を開始するにあたり、指揮者1人を含めた10人ずつのグループをつくり、第三波の土石流に備えて各指揮者による現場監視のほか、土石流が発生した場合の避難場所の確認と即座に退避命令を出すことを指示し、まず、副団長とともに現場の詳細状況の確認を開始することとしました。

現場に入ると、住宅地や道路、川の境等が全くわからないような状況でした。救助活動を開始してまもなく、流木の下敷きになった女性1人を発見しましたが、すでに亡くなられていま

した。

そこで、『危険な状況ではあるが、道路が冠水して濁流の中を避難できない住民をいち早く救助するのが我々消防団の仕事だ。』と決意を新たにし、現場指揮本部に戻り、待機中の団員に、日没までには1人でも多くの住民を安全な場所に避難させるよう命じ、活動を開始させました。

しばらく救助活動を行っている、「真尾の特別養護老人ホーム ライフケア高砂に土石流が直撃し、入所者7人が死亡、4人が行方不明。」との情報が入ってきました。

そのため、勝坂現場に数十人の団員を残し、急きょ真尾の現場へ出動することになりました。

現場に着くと、信じられない情景が目前にありました。ライフケア高砂の裏山400mほどの高さの谷部から土石流が発生し、傾斜地にある筒形の2階建て建物のコンクリート外壁の開口部が壊れて、1階部分の高い所では2.5mから3mもの土砂が流入、堆積しており、直撃を受けた部屋は天井部分まで土砂で埋まっており、人の入る隙間もない状況でした。

関係者に状況を聞いたところ、1階食堂で昼食を開始した直後に土石流が直撃し、屋内に流入してきたとのことで、逃げ惑う入所者を職員が懸命に救い出したが、数人の方が土砂にのみ込まれ、行方不明になったとのことでした。

食堂や狭い部屋に流れ込んできた膨大な量の土砂を、いつ発生するかわからない第二波の土石流を警戒しながら、消防署、警察、自衛隊、消防団等、多くの関係者が交代でスコップを手に土砂を除去していくという困難極まる救助活動となりました。

結果、最後の行方不明者も発見できましたが、大規模災害後の長期にわたる救助活動においては効率的な人員の投入をすることが重要であると、再認識をさせられる経験をした現場でした。

さらに、これらの災害の最中、この現場の500m南側の山沿いにあたる場所でも、土石流により、家屋が埋没する事案が発生していました。

この現場では、この年の3月をもって、分団長で地元分団を退団された方が、現場にいた分団員とふたりで被災家屋から2人の方を救助されました。ここでも、第二波の土石流の発生を懸念しながらの活動となったようで、最初に、首までつかる泥沼のような土砂の中を付近住民から提供された戸板等を敷いて、現場までの道筋をつけ、屋根にいた男性を救助しました。その後、家屋内に残された女性を救助するため、屋根瓦をのけ、天井板をはぎ取ったところで、室内に首まで土砂に埋まった女性を発見し、無事に救助することができたということでした。

今回の豪雨災害は、市内各所で、想像を絶する甚大な災害がほぼ同時刻に連続的に発生し、さらに二次災害の危険性が潜在する中での活動となりました。また、その後の関係者による救助・検索活動も3箇所の災害現場に分かれ、連日ほぼ1週間も続くこととなりました。

これまで、大規模な山林火災や台風災害等を経験してきた私の長い消防団員としての活動の中においても、過去例のない数多くの経験と教訓を残した災害でした。